

- 昨年9月の「中間まとめ」で示した「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の具体化に向け、これまで高校、教育委員会、団体、民間事業者など関係者・団体との間で幅広く意見交換等を実施してきたところ。
  - その際、関係者からは、
    - ー 基礎学力テストの趣旨や指導改善への活用の明確化に賛同する声や、自治体として生徒の学力を把握するツールや既存の学力テストの代替として活用したいとの声があった。
    - ー 一方で、
      - ・ 基礎学力テストの目的は様々な要素があるので、よりわかりやすい形で示せないか、
      - ・ CBT導入にあたっては、入念なシミュレーションなど慎重な検討を行うべきではないか、
      - ・ IRT導入では、問題が非公表とされているが、テスト結果を指導改善にどう生かすのか、
- など、**基礎学力テストに関し、より具体的な仕組の提示を求める指摘・意見**が多く寄せられた。

このため、本年度の「最終まとめ」に向けて、**中間まとめで提示した基礎学力テストの枠組をベースに、より具体的な仕組を検討・提示するとともに、来年度以降、予算事業等を通じた準備・試行を実施することを目指す。**

## <参考> 都道府県教育委員会等高校関係者からの主な指摘事項

- 基礎学力テストの目的については、大学入学者選抜等への活用ではなく、指導改善に用いることや生徒が自分の学習の到達度を把握することなど高校教育の質確保であることを、もっと分かりやすく示す工夫が必要ではないか。
- CBT導入に当たっては、各学校等のICT機器の整備状況に左右されるため、マンパワーの確保及びハード整備の両面から慎重に検討するとともにシミュレーションを入念に行うなど十分検討すべきではないか。
- IRT導入では、問題が非公表とされているが、どのように指導改善に生かすのか。
- 指導改善に生かすのであれば、基礎学力テストの受検時期は、高校2、3年次よりも前にすることが望ましいのではないか。
- 進学や就職に活用されない／専ら指導改善に活用するものであることについて、受検料を徴収するための説明が必要であり、受検料に見合う出題内容や、結果などのフィードバックができるのか。
- 結果の活用方法については、様々な意見が提示されている。
  - ✓ 結果が大学入試選抜や就職等に活用されると、高校が基礎学力テスト対策に追われるなど本来の目的が達成されなくなるのではないか。
  - ✓ 結果によって、進学や就職等の生徒の進路を狭めるような影響・弊害が出ることはないよう工夫・配慮が必要ではないか。
  - ✓ 活用例を具体的に示すことで受検が広がるのではないか。指導改善のみで生徒に受検するモチベーションを持たせられるのか。

# 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の目的をより分かりやすく明示(たたき台)

## ＜中間まとめで示された「基礎学力テストの目的」＞

- 高校生が身に付けるべき基礎学力の確実な育成に向けて、高等学校段階における生徒の基礎学力の定着度を把握及び提示できる仕組みを設けることにより、生徒の学習意欲の喚起、学習改善を図るとともに、その結果を指導改善等にも生かすことにより、高等学校教育の質の確保・向上を図ることを主たる目的とする。



※ 上記目的・位置付けがより明瞭になるように整理するとともに、目的を踏まえた基礎学力テストの仕組の具体化を推進

基礎学力テストについては、設置者、学校、高校生それぞれとの関係を明らかにして、結果を以下の取組に用いることで、高等学校教育の質の確保・向上に資するものとし、作問体制や実施方法などの具体的な仕組を構築する。

- 《設置者※》
  - 基礎学力定着に向けた『**基本方針や施策の企画・立案**』に取り組む
  - 教員配置や予算など『**学校支援の実施**』に取り組む

※ 国としても、全国的な高校生の基礎学力定着状況を把握・分析し、今後の施策に生かすとともに、ICTを活用した新たなテスト手法の開発に資するものとして活用。

- 《学 校》
  - 生徒個人の学習改善を促進するとともに、全校的な基礎学力の定着度合いを踏まえた『**指導の工夫・充実**』に取り組む

- 《高校生》
  - 出題の工夫や強み/弱みの適切な結果提供等を通じて興味・関心を引き出し、生徒自ら『**学びの質の向上**』に取り組めるようにする

また、その具体化に当たっては、以下の点に留意する。

- 目的を達成するには、学校現場でのPDCAサイクルの中での活用が不可欠であることから、**学校単位での参加を基本**とし、結果を学校や高校生が上記取組に活用するとともに、設置者の取組に活用できるよう、教育委員会など**設置者にもフィードバック**する仕組とする。

- 検討に当たっては、**実現可能性、費用対効果、学校現場・実施主体への過重な負担の回避**を最大限に考慮して具体化を図る。

# 基礎学力の定着・向上のための高等学校基礎学力テスト(仮称)の活用方法イメージ(たたき台)

## 設置者

- 基礎学力定着に向けた「**基本方針や施策の企画・立案**」
- 教員配置や予算など「**学校支援の実施**」

## 学校

- 基礎学力の習得を促し、学習意欲を喚起するための「**指導の工夫・充実**」

## 高校生

- 指導の工夫等により、生徒の興味・関心を引き出し、生徒自ら「**学びの質の向上**」に取り組めるようにする。

### 活用方法のイメージ例

- 大枠の教育方針を策定していく際に、**教育目標設定の目安**として活用。
- 教員定数配分や補習指導員の配置、生徒の学習状況等を踏まえた**人材配置**のための判断材料の一つとして活用。
- 基礎学力向上に取り組む重点校の指定**や**重点的に取り組む課題を設定**するためのデータを取得するために活用。

など

### 活用方法のイメージ例

- 学校の**教育目標の達成指標**として活用。
- 多様な入試を経て入学した生徒について、その後の**基礎学力の習得度合い**やその**伸び**を測定するために活用。
- 生徒の**つまづき箇所**を分析し、**弱点克服**に向けて**個別に学習指導や支援**を行うために活用。
- 学校の実態を基に、**加配や補習指導員を活用した少人数・習熟度別授業**行ったり、**学校設定科目の内容を設定**したりするなど教育課程編成の工夫を行うために活用。

など

### 活用方法のイメージ例

- テストの結果から**自らの強みと弱みを理解**させ、教員の指導と相まって、**効果的に学習に取り組ませる**ために活用。
- 社会で自立するために必要な基礎学力とはどういうものかを認識**させ、教員の指導と相まって、**学習への動機づけ**を行うために活用。
- 義務教育段階の**学び直しから学習の成果を実感**させ、**達成感を高め**させるために活用。

など

基礎学力の  
定着・向上の  
ための支援

## 国の取組

共同システムの基盤の構築  
 ・問題作成方針の策定  
 ・問題作成体制の構築

設置者、学校等への支援

- ・多様なデータの提供
- ・取組の好事例の提供
- ・指導体制の充実支援
- ・教員研修の実施・支援

データに基づく国の教育施策  
の検証改善

## 各主体の判断で、様々な活用目的に応じた利用

各主体が利用目的に応じて共同で利用できる高等学校基礎学力テスト(仮称)

- ・学習指導要領に対応し、社会で自立するために必要な基礎学力を問う問題を提供。
- ・各設置者、学校、生徒の主体的な取り組みを支援する情報を提供。  
例) 学習内容の習得度を示すデータ、分野ごとの強み弱みを示すデータ、結果の伸びを示すデータ 等  
 ※学習習慣等に関する調査を併せて行うことで、より詳細な分析に資するデータ提供も可能
- ・出題内容と学校の実態に対応した、授業・指導等の工夫やアイデア例を提供。
- ・高校教員による作問や分析等への参画を通して、問題作成手法等の研修の場を提供。

## 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の対象に関する趣旨等の明確化（たたき台）

### ＜中間まとめで示された「対象」＞

- ボリュームゾーンとなる平均的な学力層や、底上げが必要な学力面で課題のある層を主な対象として出題する。

※ 上記の層を対象とした趣旨や留意すべき点をより明確にすることで更なる理解の促進を図る

- テスト結果から**生徒の基礎学力面の課題をきめ細かく把握**することができるように出題することとし、受検については、基礎学力テストの目的や出題内容等を踏まえた上で、**学校または設置者が適切に判断し、基礎学力の確実な育成に効果的に取り組む**ことができる仕組みとする。
- その際、これまで基礎学力の定着に向けて取り組んでいる**高校や設置者の先行事例等を参考**にしなが、基礎学力テストを受験することや結果を否定的な評価として捉えるのではなく、基礎学力の定着を目指す**積極的な取組として社会的に評価されるよう普及啓発等**を行うことが必要である。
- なお、学校が参加していなくても、**希望した生徒については受検**できることは担保する。  
(更に、高校等を卒業した者等も受検することができる仕組みとして、具体的には、今後試行等を通じて検討)

## 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の実施時期等の見直し（たたき台）

### ＜中間まとめで示された「実施時期・回数」＞

- CBT-IRTが円滑に導入された場合、導入当初は、夏から秋までを基本に、高校2・3年で生徒がそれぞれの希望に応じて年間2回受検できる仕組みとし、随時見直し。

※ 中間まとめで示した上記事項に対する現場からの指摘等を踏まえ、指導の工夫・充実により適した実施時期等に関する考え方を整理

- 実施時期については、基礎学力テストの目的や高校教育の質の保証という観点から、「高校3年次での受検では遅いのではないか」との高校現場からの意見を踏まえ、**学校の指導の工夫・充実に資するよう、主として高校1・2年次に受検**することを前提とし、**高校3年次や過年度卒業生であっても受検できる**こととする。
- 具体的には、教育課程編成や学校行事等を勘案しつつ、**学校または設置者において適切に判断できる仕組み**とする。
- なお、大学入学者選抜や就職への活用の在り方については、平成31年度～平成34年度の「試行実施期」において実証的なデータや関係者の意見を踏まえながら検討することとしているが、その際、2年次までの結果は活用されぬよう配慮が必要である。

## 中間まとめにおける「提示できる仕組み」の今後の検討の方向性（たたき台）

### <中間まとめで示された「活用の在り方」>

- 生徒による主体的な活用とともに、高校での指導改善や国や都道府県等の教育施策の改善にも活用。
- 平成31年度～平成34年度までは「試行実施期」と位置付け、この期間は原則、大学入学者選抜や就職には用いず、本来の目的である学習改善に用いながら、その定着を図ることとし、そこで得られた実証的データや関係者の意見を踏まえながら検証を行い、必要な措置を講じる。  
平成35年度以降の大学入学者選抜や就職への活用方策については、仕組みの定着状況やメリット・デメリットを十分に吟味しながら、関係者の意見を踏まえ、更に検討。

- 基礎学力テストの目的が、①設置者による「基本方針や施策の企画・立案」や「学校支援の実施」、②学校による「指導の工夫・充実」、③生徒自らの「学びの質の向上」であること(P3参照)を念頭に、テスト結果の副次的な利用については、**これらの目的・趣旨を没却しない範囲内で行う**こととし、多様な方法が考えられ得ることを念頭に置きながら**有意義な利用方法を今後さらに検討**する。

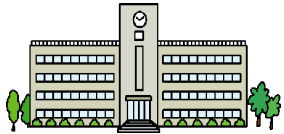
#### 【参考】 将来的に考え得る副次的な利用の例

- 大学等を受験する生徒が、自らの成果を示すものとして自発的に提出
- 選抜等を行う大学等が、出願資格として一定の水準を設定する際に利用
- 大学等が、選抜等の際に行う多面的な評価の判断材料の一つとして利用

(注) 選抜等の活用の在り方に関し、生徒が自発的に利用しようとする場合に具体的にどう扱うべきかについては、引き続き検討。

# 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の全体イメージ (たたき台)

## 高校等での蓄積された 既存資源の活用



### 高校教育の試験問題

- ▶ 高校の定期考査、教委・校長会・学校が実施する実力テストの問題 など

### 義務教育の試験問題

- ▶ 県教委が実施する高校入試の問題 など

▶ このほか、

民間の資格・検定試験等にある問題提供の協力依頼を検討

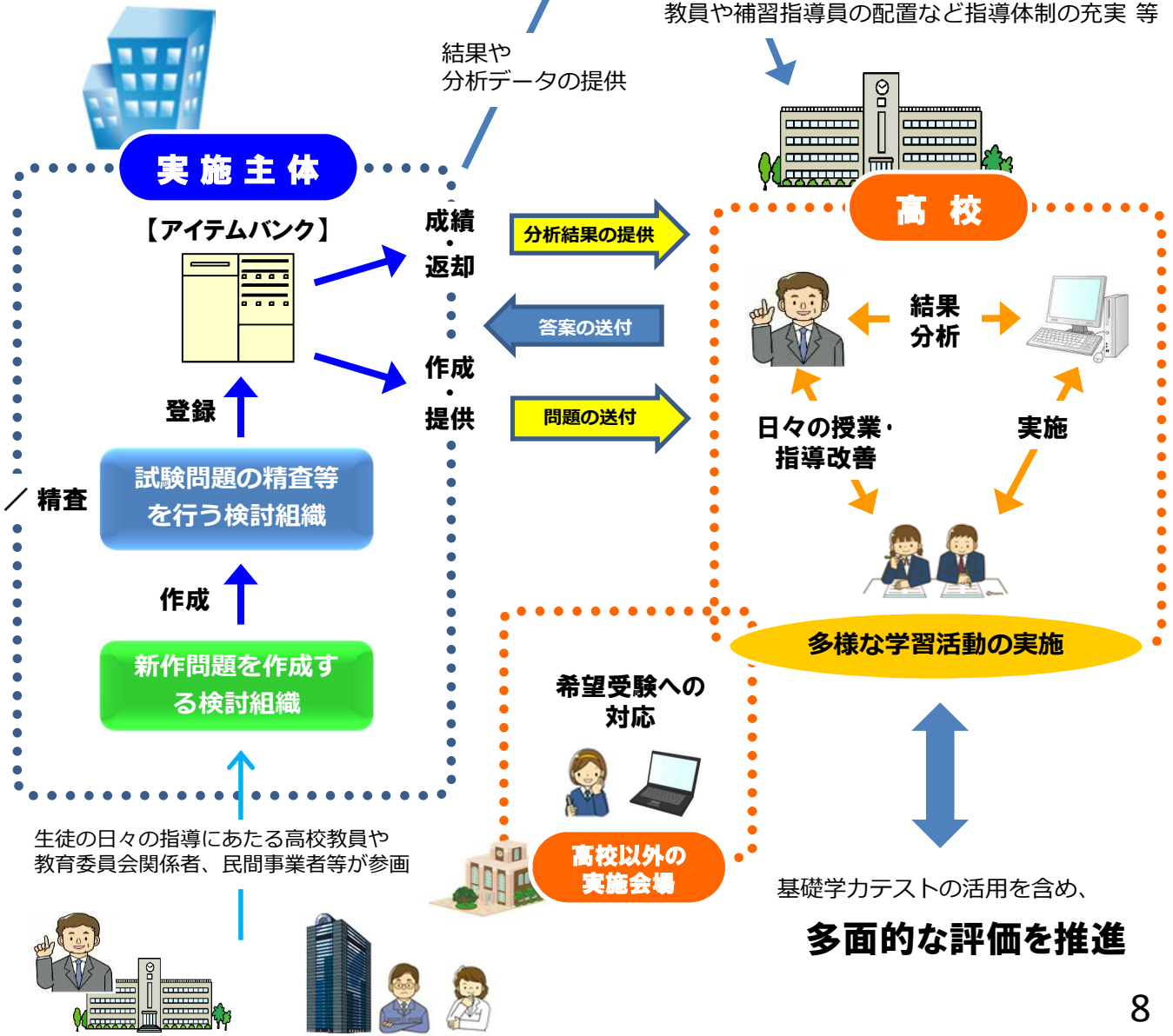
学校・教委・関係団体から提供

国

高校学習指導要領や教員の指導力向上、教職員定数や予算事業等での支援

設置者(都道府県等)

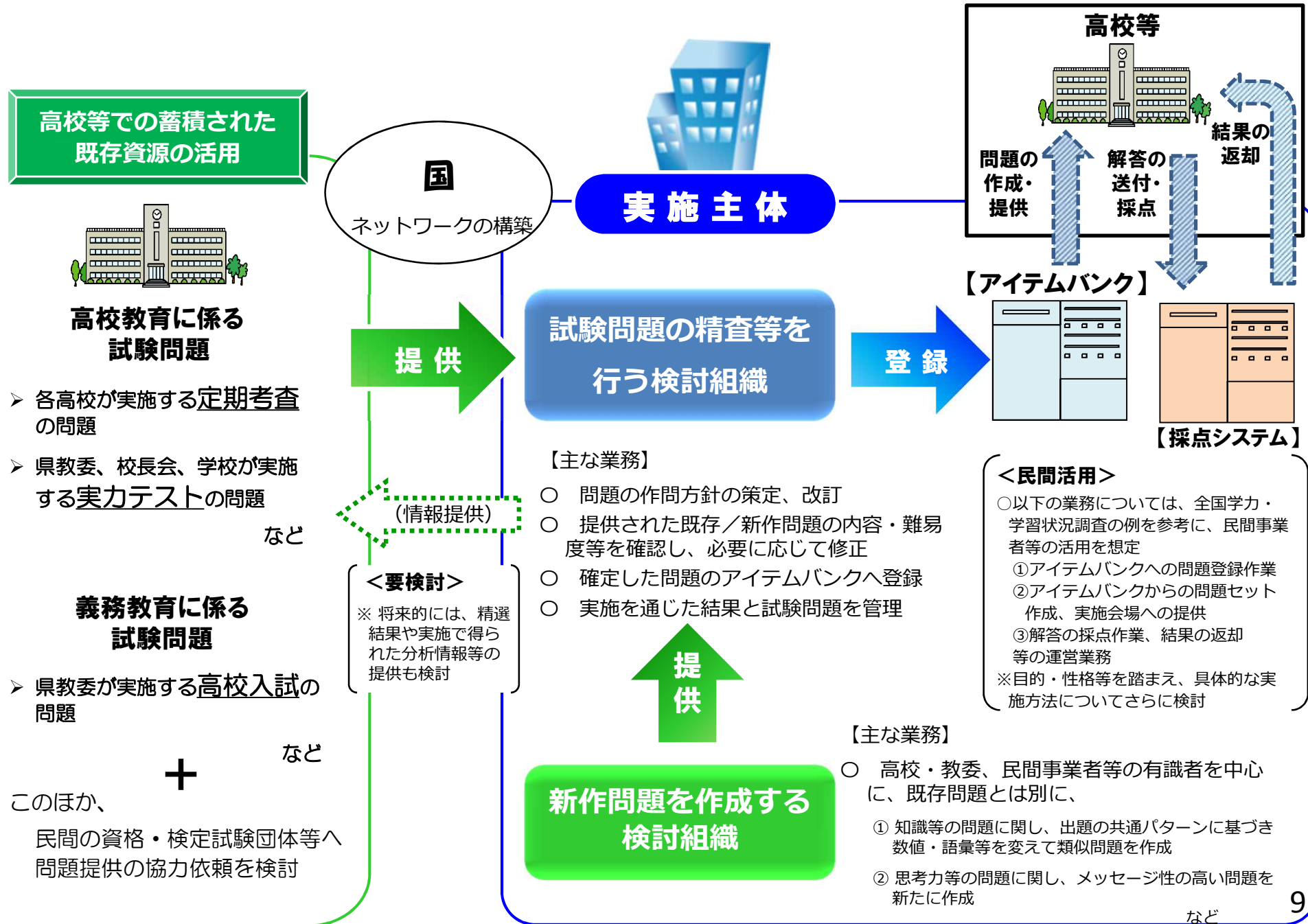
データに基づき、支援が必要な高校への教員や補習指導員の配置など指導体制の充実等



基礎学力テストの活用を含め、  
**多面的な評価を推進**



# 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の試験問題の作成・収集等の仕組（たたき台）



## ④「高等学校基礎学力テスト(仮称)」のCBT導入に係る検討(たたき台)

### <基本的な考え方>

- 昨年9月の「中間まとめ」では、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の実施方法として、CBT方式を前提に検討を進めることとされている。(※ただし、実現可能性も踏まえつつ、紙によるテスト実施も念頭に置きつつ検討)
- 実施方式としては、いくつかのパターンが考えられる(次ページ参照)が、
  - ① 現在実施中のCBTの構築に向けたシステム設計に係る委託事業の成果を参考にしつつ、
  - ② 実現可能性を高めるとともに、実施主体や学校現場での実施面・運用面での過重な負担を避けることに配慮して、今後の検討にあたっては、以下に掲げる方向で制度設計を進めることとする。

### <主なポイント>

- 基礎学力テストにおけるCBTの実施方式は、**原則、高校に既に整備されているモバイルやパソコン等において、実施主体から提供されるCD-RやUSB等を使用してテストを行う「インハウス方式」**をベースに、その具体化に向けた検討を進める。

※ ただし、将来的にICT機器の開発等によってパソコン等が安価に入手可能となることも想定し、実施主体によるパソコン等の貸与を基本とした「モバイル方式」の可能性についても併せて検討。

※ また、予算確保の状況や離島・中山間地域にあって整備が順調に進んでいないなどやむを得ない事情があった場合には、インハウス方式を前提にパソコン等を貸与、或いはテストセンターを設置して実施する方法などの可能性も検討。

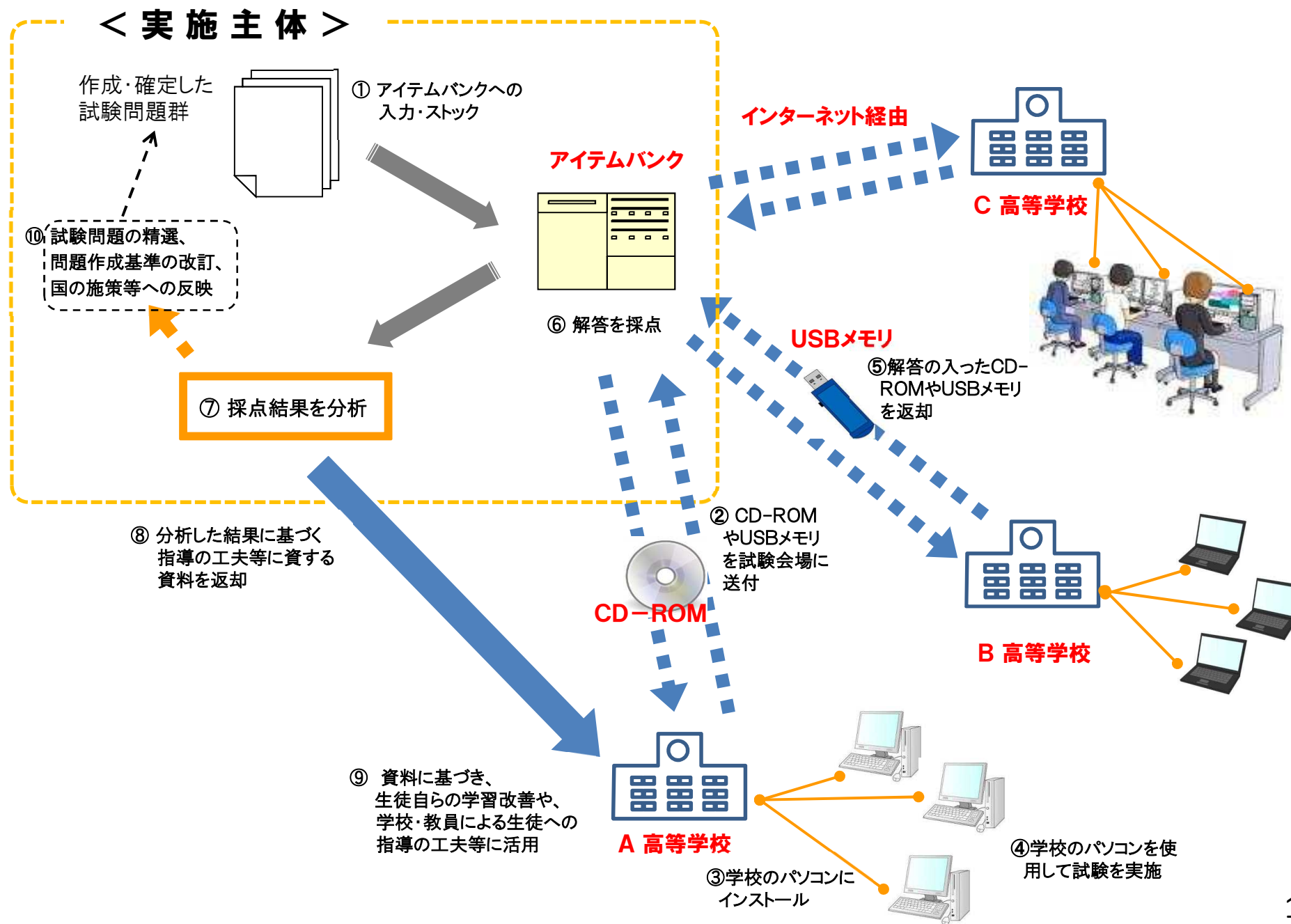
- その際、教育委員会など高校現場にコンピューターを配備する立場の**設置者等に対し、事前に、基礎学力テストの実施に適したパソコン等の推奨スペック**(例:画面の解像度・インチ数、処理能力、録音等が可能となる附属機器等)**を提示**し、パソコン等の入替時にあたって検討するよう促す。

※ 一般的なリース契約の年数(例:5年程度)等を考慮し、基礎学力テスト結果の進学・就職等への活用の在り方の整理が行われる35年度以降の基礎学力テストにおける実施環境の整備を念頭に適切なタイミングで設置者等に提示することを検討。

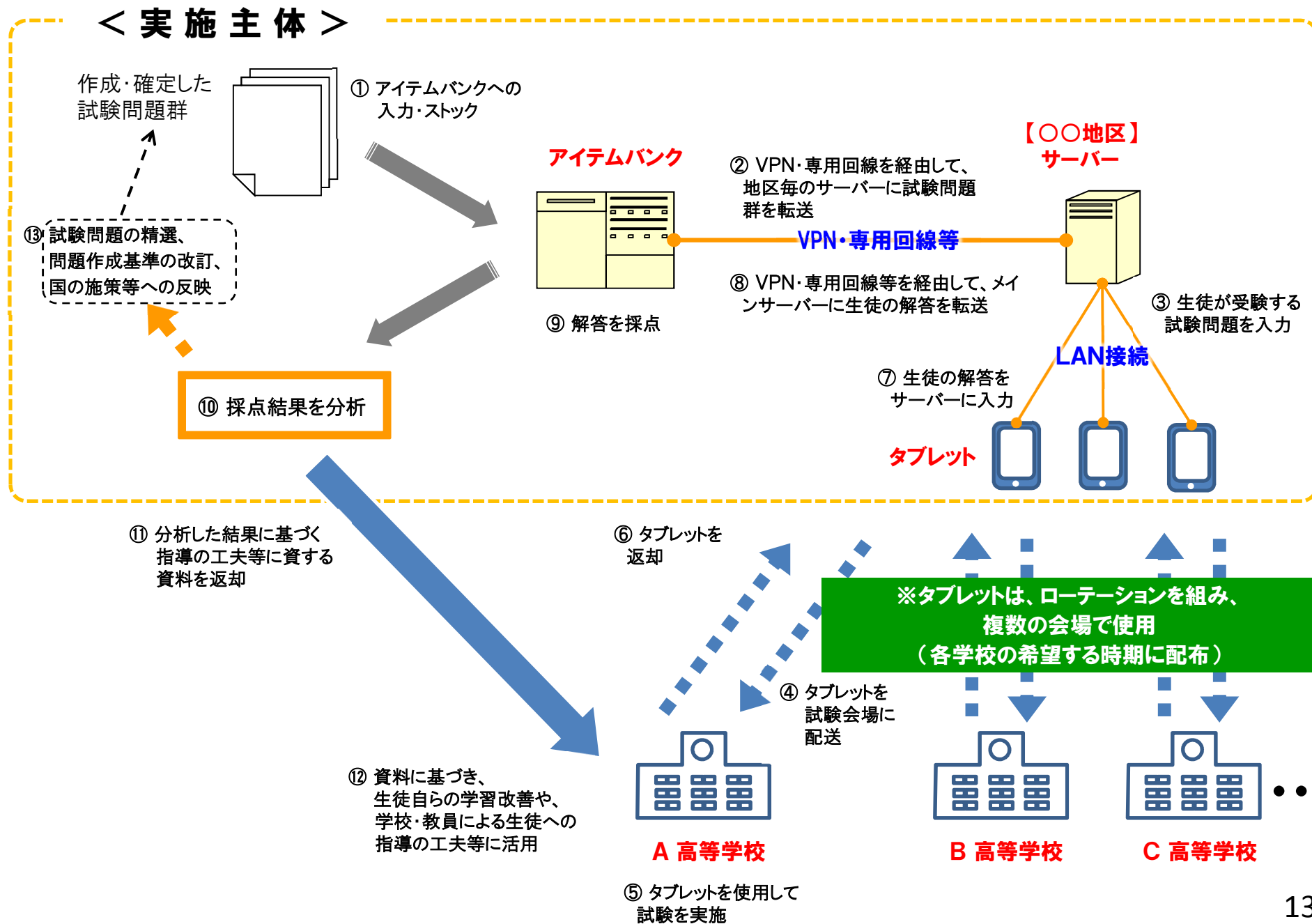
## CBTを導入する場合に考え得る実施方式の比較検討（たたき台）

\		① パソコン等の貸与 (モバイル方式)	② 学校内のパソコン等の活用 (インハウス方式)	③ テストセンターのパソコン等 (テストセンター方式)
A	システムの安定性	○	△ (OSやコンピュータが不統一)	○
B	セキュリティ	△	△ (CD-ROM 等) × (ネット)	○
C	機器導入コスト	×	○	△
	運送コスト	× (大型、大量)	△ (必要：CD-ROM 等は小規模) ○ (不要：ネット活用)	○ (不要)
	施設維持コスト	△～× (全国数カ所にデータセンターを配置)	○	△～× (大規模なテストセンターを独自に常時維持する場合にはコスト増)
D	アクセスのしやすさ (離島、過疎地等の生徒)	○	○	△～× (大規模なテストセンターを独自に常時維持する場合には設置場所が限られる)
E	大学評価テストとの 機器の併用	△ (セキュリティ等の違いから併用 が可能か要検証)	×	△ (セキュリティ等の違いから併用 が可能か要検証)
(参考) 導入事例		GTEC for STUDENTS (スピーキングのみ)	医療系大学間共用試験、SPI など	TOEFL, TOEIC など

【参考】インハウス方式(高校パソコン活用型)のCBTによる試験問題の作成・実施・採点等の流れ(イメージ)



# 【参考】モバイル方式(タブレット活用型)のCBTによる試験問題の作成・実施・採点等の流れ(イメージ)



## 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」のCBT導入に向けて今後検討すべき事項(たたき台)

### 【今後検討すべき事項】

- ✓ インハウス方式をベースにした場合には、高校に導入されるパソコン等の台数の制約により、学校単位での同一問題／同一日時でのテスト実施は困難となる。
  - ⇒ 学校内で一定期間内での分割実施を念頭に、IRTなど何らかのテスト理論に基づいて、大量の問題ストックから選択された問題でテストを実施することが可能となるよう更に詳細な検討が必要。
- ✓ また、既設のパソコン等を利用するインハウス方式とした場合には、パソコンの性能等に違いが生じ得ることとなり、センター試験や入試試験のような「選抜」に用いられるテストとの比較において、その厳密性が低下することとなる。
  - ⇒ 通常の学校で行われる定期考査や実力テストのように「学力の定着度の確認」や「指導の工夫・充実」に使うものであるということを、関係者との間で理解を得ることが必要。
- ✓ 4技能を測定することが求められる「英語」の試験については、どこまでをCBT方式で実施することが適当かについて個別の検討が必要。
  - ⇒ 次ページ資料を参照。

(注: 加えて、CBT方式の実現可能性を踏まえ、紙によるテスト実施も念頭に置きつつ検討を進める。)

## 【参考】英語の試験を実施する方式に関する検討（たたき台）

### <基本的な考え方>

- 高校における英語教育では、「読む」、「聞く」、「書く」、「話す」の4技能を総合して実施することが求められており、基礎テストにおいても、英語の4技能を評価・確認できるテストの実施方法を検討することが必要。
  
- 一方、基礎テストはCBT導入を前提に検討することとなっているが、特に、英語のテストについて、仮にCBTで実施することになった場合には、
  - ①「話す」に関する問題の出題／解答を、どのように行うかといった課題や、
  - ②「書く」や「話す」など、最終的に人による採点が必要となることによる、採点人員の養成・確保の課題がある。（なお②の課題については、国語・数学で記述式を実施する場合も同様に検討が必要）
  
- このため、基礎テストにおける「英語」の実施方法については、現在議論が進められている全国学力・学習状況調査での英語調査の導入の検討を参考にしつつ、平成28年度以降の準備作業を通じて確定していくことを目指す。

### <参考：全国学力・学習状況調査での英語導入に向けた平成27年度英語力調査(中学3年生)の概要>

- 全国の中学3年生約6万人(国公立約600校)の英語力(「聞くこと」「読むこと」「話すこと」)を調査(抽出)うち、約2万人を対象に「話すこと」も調査(1校あたり1クラスを対象)
  
- 「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の試験と「話すこと」の試験を分けて実施
  
- 「話すこと」については、各校の教員が事前に研修を受け、面接・採点を実施
  
- 「書くこと」については、答案のデータを海外に送付し、専任スタッフが採点を実施